

会 告

二〇一〇年度史学研究会大会および総会は、予定どおり一月二日(火)午後一時より京都大学文学部新館にて開催されました。

公開講演は、杉山正明、近藤和彦の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終わりました。

マルコ・ポーロの実像

杉山 正明氏

モラル・エコノミー論を歴史的に再考する

近藤 和彦氏

なお、大会と総会に先立って開催された定例の理事会・評議員会において、二〇一〇年度会務報告がなされました。

二〇一〇年度

史学研究会大会講演要旨

マルコ・ポーロの実像

杉山 正明

マルコ・ポーロは、いわば世界の誰もがその名を知っている世界史上の超有名人である。しかし、たしかに一箇の人間として実在したかどうか。一三二四年の遺産目録なるものがある。だが、その真偽は定かでない。当時のヴェネツィアにポーロ一族は存在したらしいが、奇妙なことに公的な文書・記録による裏付けとなると、途端にうろこんとなる。ようするに、マルコ・ポーロ自身も含めて、全体になにか霧がかかっている。

そのいっぽう、マルコ・ポーロの『旅行記』とされる多様な写本が多言語で存在する。その数は、およそ二一〇種。そうした『旅行記』やさまざまな伝承においては、マルコ・ポーロとその父・叔父は紛れもなく「実在」し、生き生きと躍動している。つまり、マルコ一家の存在を否定し去るこ

ともまたできない。ようするに、マルコ・ポーロについてのすべての出発点は、彼が「実在」したという前提に立つ。すくなくとも従来は、無条件にそうしてきた。だが、はたしてそれでいいのか。

実はごく最近、マルコ・ポーロの存在を裏付けるかもしれないひとつの史料を発見した。しかし、それにしてもともかく、あまりの謎というか疑問が多すぎる。ありていにいえば、実像と虚像が色とりどりに散乱している。はたして『旅行記』で語られる体験・見聞は、彼と父・叔父という三人だけのものだったのか。くわえて、そもそもそうした記事は、どこまでバックアップがとれるのか。マルコたちの行動やそれについての記述をひとつひとつ、丹念に検証・確定していかなければならない。しかし、従来そうした作業は意外なほどに、あまりきちんとされていない。

それは、結局のところ、フランスのペリオやイタリアのベネデットをはじめ、あまたの先人たちが互いに争いあいつつ苦闘したけれども、『旅行記』の最終校定本さえ実のところはまだ十分には確立できていないこと、くわえてマルコ・ポーロ『旅行記』

の内容把握のためには、少なくとも膨大な漢語文獻はもとより、当時の「国際語」であつたベルシア語をはじめ、十数個の言語にひととおり通じている必要があること、そしてモンゴル世界帝国の出現と世界史の大転回という事態のなかで、ユーラシアないしアフロ・ユーラシアの東西にわたる広やかな知見を備えていなければならぬこと——すなわち、そこにこそ大きな壁があつた。

ひるがえつて、そのいっぽうマルコ一家とは別に、あきらかに複数のさまざまな人間の知識・情報が「旅行記」の記述に取り込まれ、もしくは投影されているケースもかなり目につく。ごくおおまかにいえば、今わたくしたちが眺めている一連の「旅行記」なるものには、数多くの「原典」・データ・資料といった「もとネタ」めいたものが使われている。それも、かなり頻繁に。マルコたちというべきか、もしくはマルコの話を経ノヴァの獄中で書きとめたとされる叙述者・物語作家としての有名なルステイケツロ・ダ・ピーサも含めてか、ともかく「旅行記」のなかでマルコ一家は他の人の仕事や業績・功業を自分たちがな

したかのように得々と物語る。その剽窃・盗用・「パクリ」は、呆れるほどである。

別の見方をすれば、マルコたちはそういう特別な文獻や資料、もしくは秘密情報などについて、アクセスできる立場・環境にいたことになる。そうした可能性は十分に想定しうる。もしそうであるならば、マルコたちは「一介の人間」では到底ありえない。世界帝国の皇帝クビライの周辺に近侍するような、しかるべき状況を考えるほうが素直かもしれない。ともかく、今わたくしたちの前に投げ出されている「マルコ・ポーロ旅行記」という名の雑然たる「かたまり」は、「見たこと」「聞いたこと」、そして「盗用したこと」など、もろもろの集大成といえるものであつた。

かえりみて、マルコ・ポーロとその「旅行記」については、古くから多くの西洋人そして日本人、近年は幾らかの中国人といった学者・研究者が挑戦してきた。精粗とりまぜて、その膨大な蓄積は、二十数年前日本で『マルコ・ポーロ書誌』なるかなりぶ厚い書目が出版されたほどである。「マルコ・ポーロ熱」は、中国の興隆といった国際情勢もあつてか、むしろ益々さかんと

いつていい。

ただし、それに便乗するような浅はかな著作がこのところ妙に目につく。西洋人による学術研究の全般的な退潮は、「文明の衰え」さえおもわせるものがあるが、それにしても呆れるばかりのひどさであつた。では、どうするか。多分、マルコ・ポーロ研究の大きな可能性は日本にある。まさに今、日本を中心に国際的なプロジェクトを組みつつある。その成果をお待ちいただければ幸いである。

なお、以上は要旨というよりも、前書きのようなものである。詳しくは、近刊予定の二つの拙書にて述べます。

モラル・エコノミー論を

歴史的に再考する

—— デジタル・アーカイヴによる
E・P・トムスン再審 ——

近藤和彦

今日の英語 *moral economy* はなんでもありの「マネーゲーム」に對置され、コミユニティを重視し不平等と取り組む立場、

道徳的な経済秩序といった意味合いで用いられている。学術出版のデータベースを検索すると、「中近世における食欲・独占とモラル・エコノミー」、「人の胚幹細胞科学とグローバルなモラル・エコノミー」、さらには「新しいモラル・エコノミーにおける母業」といった表題さえあり、百家争鳴状態である。

だが、二〇世紀の学術用語としてモラル・エコノミーを最初に用いたのは、E・P・トムスンである。トムスンは一九五〇年代から七〇年代の英語圏の社会史においてもっとも影響力のあった歴史家の一人であったが、一九六三年の主著において、一八世紀から一九世紀にかけてのイングランドで政治文化が決定的に変貌したことを考察し、変貌前の状態を「古きモラル・エコノミー」と形容した。暴動のような直接行動の頻発に注目して、これを民衆的な制裁の伝統と解釈したのである。この議論はさらに一九七一年に「一八世紀のイングランド群衆のモラル・エコノミー」という論文で全面展開され、民衆行動を正当化した秩序と正義の理念が論じられた。このとき、民衆行動の自律性と統治者側の家父長主義

の比重は、両義的であった。続く論文では、さらに民衆と統治者のあいだの互酬関係、演劇的なやりとり、そして磁力の変化する磁場が扱われた。こうした議論は、N・Z・デイヴィス、C・ギアツ、J・スコットなどの研究（叙述力）とともに、転換期の社会における民衆文化、正義、秩序、正当性を問う研究者に圧倒的な影響を与えた。

他方で、実証史学や思想史からの批判もあいついだ。そのうちもっとも重要なのは、ホントとイグナティエフの共編著『富と徳』（一九八三）であろう。両者によるトムスンのモラル・エコノミー論批判は三つの点に収斂する。①一八世紀には統治者も政治経済学者ともにモラル問題を抱えていたことを看過して、トムスンは *moral economy* と *political economy* の二律背反を論じた。②トムスンは議論をイギリスに限定するが、イギリスは啓蒙ヨーロッパの部分であった。③フィロゾフやエコノミストのあいだでも食糧営業の自由、規制をめぐる鋭い論争が進行中であった。これら三点にたいしてトムスは有効に反論していない。それどころか、一八世紀の史料で用いられていたというモラル・

エコノミーの出典を示すことができず、むしろ政治文化の大変貌のあと、一八三七年の用例を挙証している。

このアポリアにどう対処するか。解決策の一つは、トムスン自身の残した文書記録にある。トムスン家文書が現在オクスフォード大学図書館にあるが、これは死後五〇年間非公開という条件で寄贈されており、二〇四三年まで見ることはできない。トムスンと研究助手ドッドのあいだの通信はウオーリック大学現代史文書館に寄贈され、こちらは公開されている。わたしはすべてを読んだが、モラル・エコノミーという語は一度も用いられていない。あたかも禁忌であるのごとく、謎は深まる。

第二の解決策がデジタル・アーカイヴである。刊行物にかぎられた電子データベースであるが、グーテンベルク期から一七〇〇年までのE E B O、一七〇一年〜一八〇〇年のE C C O、広義の経済・社会学のコレクションM O M W（一五世紀〜一九世紀）といった三つのアーカイヴを全文検索し、文脈と用法を分析することによって、従来のアナログ調査では不可能だった根拠にもとづく議論が可能である。もちろん

ん、これは従来型の研究を無にするのではなく、両者の相互補完によって意味ある議論が成り立つ。

当日の報告では検索画面も紹介しつつモラル・エコノミーの用法の変遷を明らかにした。帰納的にまとめると、用法Aは神学的な文脈で、神の定め、摂理による秩序という意味であった。中世ラテン語における *oikonomia* = *dispensatio* の継統とみられる。用法Bは一八世紀後半に現れ、世俗的な文脈で社会的な諸条件、有機的な秩序を指した。またB+として、倫理的な改善、有徳の生き方といった評価が付加価値として加わった用例がある。一七九九年ないし一八〇九年からは *political economy* と *moral economy* を並置した用法Cが現れる。社会的な資源の有効利用をめぐって連想された知のあり方である。ただし、決して二律背反ではない。一八〇九年に出現する用法Dは社会秩序をめぐる理念であり、一部の人々が抱懐し、一部の人々が拒絶した。

このように、キーワード検索により長期的な言説のコーパスを分析し、モラル・エコノミーの歴史的な変遷、多様な用法を確

認することができる（統計的処理になじむほど十分であるかどうかは、留保したい）。調査をふまえてトムスの議論を再審すると、二重の問題が指摘される。（一）トムスはモラル・エコノミー用語の長い一八世紀における多様性を考慮することなく、B+ないしDに限定して議論を組み立てた。（二）彼自身が挙証した一八三七年、チャールズ・テイストの記事を再読すると、たしかにB+ないしDの論述であるが、しかし、これは真正の *political economy* は *moral economy* を包含するべし、という議論をなしていた。

ここから導かれるのはE・P・トムスの脱神話化であり、今日の経済社会を批判する眼の相対化である。デジタル化により、いま歴史研究は革命的に変貌しつつある。

二〇一〇年度

史学研究会大会・総会の記録

史学研究会の二〇一〇年度大会・総会は、一月二日（火）午後一時から五時まで、京都大学文学部新館第三講義室において開催された。

総会では、夫馬進理事長による挨拶の後、泉拓良氏を司会に選出して、庶務・編集・会計・広報に関する報告・審議がなされた。庶務（吉井秀夫常務理事）からは、役員交代、今年度の例会実施について報告があり、来年度は四月十八日（土曜日）に「都市」をテーマとして開催することが案内された。また、六月の理事会・評議員会で承認された会則の改正案を提示し、総会の承認を得た。

編集（吉本道雅常務理事）からは、『史林』の刊行について報告があった。

会計（金澤周作常務理事）からは、二〇一〇年度予算の紹介、科研費申請の準備についての報告があった。

広報（谷川稯常務理事）からは、ホームページのリニューアル作業を進行中であり、今年度中には公開できる予定であるとの報告があった。

これに引き続き、公開講演が行われた。講演は次の二本であった。

杉山 正明氏

「マルコ・ポーロの実像」

近藤 和彦氏

「モラル・エコノミー論を歴史的に再考